吉野川市山川町の方言

方言班（徳島県方言学会）

仙波　光明[*1]　　村田　真実[*2]　　峪口有香子[*3]

要旨： 2拍名詞のアクセントでは，第4類と第5類が合流しつつあるという徳島市で進んでいる現象は確認できなかった。また3拍名詞第4類「頭」「袋」「鏡」「宝」から，上郡と同じ傾向の高平調（HHH）が聞かれた。3拍動詞では，伝統的な京阪式アクセント（徳島型）から讃岐式アクセント（池田型）への変化が完了していると見られる結果が得られた。発音の面では，シェ・ジェがかなり濃厚に残っているものの合拗音クヮ・グヮが高齢者の間からも消えてしまっていることが注目される。断定の助動詞は，ジャが優勢であるがヤも現れることが確認された。助詞についてはキンドが残っていることが観察できた。性向語彙のうち，トボケサク，ハチフン，ワルンゾは山川町史以外に確認できない語であった。

キーワード： アクセント，2拍名詞，3拍動詞，性向語彙，談話

1．はじめに

今回の調査は，2つの方法で行った。調査票の読み上げによるアクセント調査，および談話を資料として，そこに現れる言葉を分析した。談話によったのは，できるだけ自然な形で方言の現れ方を見たかったためである。調査は2011年8月1日，吉野川市山川町字山路の吉田幸治氏のお宅で行わせていただいた。

2．吉野川市山川町の方言区画上の位置づけ

徳島県の方言区画上から見た，吉野川市山川町（以下，山川町とする）は，森重幸（1982）によると，「下郡里分」に属し，その西端部にあたる。なお，下郡里分は，吉野川北岸では阿波市を西端とし，吉野川下流域の徳島市，鳴門市までの広い地域である。

3．アクセント

1）概要および先行研究

山川町のアクセントは徳島市中心部と同じで，京阪式（徳島型）に分類される。吉野川南岸域においては，美馬市穴吹，つるぎ町貞光，同半田以西に分布する讃岐式アクセント（池田型）とは異なり，山川町は京阪式アクセント（徳島型）の最西端と言える。加藤（1968），上野（1997）にも山川町は京阪式アクセントの地域であるとされており，また，最近の調査である岸江・仙波・岡田・村田（2010）の報告でも，山川町は京阪式アクセント（徳島型）の地域としている。京阪式（徳島型）と讃岐式（池田型）の境界線は山川町の西側に引かれるようであるが，本稿ではこれらの報告を受けて，改めて山川町のアクセントの動向を確認したい。

＊1　徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部　＊2　徳島大学大学院総合科学教育部地域科学専攻博士後期課程
＊3　同博士前期課程

2）調査方法

一対一の面接調査である。話者にアクセント表を手渡し，それを読み上げて頂き，村田が聞き取った。聞き漏らしをなくすために，ＩＣレコーダーで録音し，調査後あらためて確認した。聞き取り一覧表は紙幅の都合上省略する。

調査語彙は『早稲田語類』（坂本他・1998）から偏りなく選んだ。具体的な語については各章の最初に記した。名詞は名詞単独，名詞＋助詞＋動詞，「この」＋名詞＋助詞＋動詞の項目を設けて詳細に調べた。動詞，形容詞は語単独のアクセントを調べた。

話者情報は**表1・2**の通りである。

表1

ID	性別	職業	年齢	生年	生育地
1	M	会社員	78	1932年	麻植郡川田町
3	M	農業	90	1921年	吉野川市山川町
4	M	農業	85	1925年	吉野川市山川町

表2

ID	父出身地	母出身地	妻出身地	居住歴
1	山川町	山川町	川島町	なし
3	山川町	山川町	山川町	なし
4	山川町	山川町	穴吹町	大阪４年

3）名詞のアクセント

表3　1拍名詞のアクセント

第１類	蚊，血	H－H
第２類	葉，日	H－L
第３類	絵，木	L－H

１拍名詞の結果は**表3**の通りである。類の統合状況は３（１／２／３）で，それぞれに音調が違う。話者に伺ったところによると，この地域では長音化（「蚊ぁが」「葉ぁが」「絵ぇが」など）の現象は起こらないようである。現に３名の話者から長音化の現象は聞かれなかったし，３名とも「語を長くのばしたりしますか」という質問に対して「いいえ」と答えた。

ただし，談話の中では「山崎のイチョウは実（ミー）がならん」と言い，また「イチョウの葉（ハー）」とも言っている。一方，「ミガナル」「ツバキのハ」と長音で発音されない言い方も現れている。長音化した発音は，無意識のうちに現れているのであろう。

さて，２拍名詞は，「竹，鳥，鼻，端，箱，水」（第１類），「歌，音」（第２類），「耳，山，亀，花」（第３類），「糸，海，息，空，箸，松」（第４類），「井戸，鍋，窓」（第５類）を調査語彙とした。その結果は，以下の**表4**に示すとおりである。第２類と第３類とがともに頭高型に統合されている。類の統合状況は４（１／２・３／４／５）で，伝統的な京阪式アクセントらしい分かれ方をしている。近年，京阪式アクセントが分布する地域の各所で，第４類が第５類に統合する現象が起こっているが，山川町にはまだその変化は訪れていないようである。また，讃岐式アクセント（池田型）に隣接する地域でありながらも，讃岐式アクセント（池田型）の音調に引かれることなく，京阪式アクセント（徳島型）を保持しているところは注目すべき点である。

表4　2拍名詞

第１類	竹，鳥，鼻	HH／HH－H
第２類	歌，音	HL／HL－L
第３類	耳，山，亀	
第４類	糸，海，息	LH／LL－H
第５類	井戸，鍋	LH／LH－L

３拍名詞は，「形（かたち），着物（きもの），鼻血（はなぢ），車（くるま），魚（さかな），鰯（いわし）」（第１類），「ふたり，二（ふた）つ，蜥蜴（とかげ）」（第２類），「小麦（こむぎ），二十歳（はたち），ちから」（第３類），「頭（あたま），鏡（かがみ），袋（ふくろ），宝（たから），女（おんな），男（おとこ），刀（かたな），サザエ，」（第４類）「油（あぶら），朝日（あさひ），心（こころ），簾（すだれ）」（第５類），「兎（うさぎ），蛙（かえる），鼠（ねずみ），ひばり，うなぎ，狐（きつね），雀（すずめ），すすき」（第６類），「鯨（くじら），便（たよ）り，兜（かぶと），後（うし）ろ，蚕（かいこ），椿（つばき）」（第７類）の各語について調べた。その結果は，次のページの**表5**に示すとおりである。

類の統合状況は一言では述べがたい。第１類，第３類，第６類，第７類については伝統的な京阪式アクセントらしい音調が聞かれた。

一方，京阪式（徳島型）の伝統的なアクセントと異なる音調として，第４類「頭」「袋」「鏡」「宝」では第１類と同じ高平調（HHH）が聞かれた。本来，第４類の伝統的な京阪式アクセントはHLLである。HLLで実現した語は「刀」「サザエ」だけであった。1999年の石田祐子の調査（石田・岸江2001，仙波・岸江・石田2002）によれば，「宝」のアクセントは，下郡のほとんどでHHLになっているが，今回の結果は，すべてHHHになっている。これは，上郡（中でも吉野川北岸地域）に見られるアクセン

トである（**図1**：仙波他2002）。また，「女」の場合は，下郡の東側でHHL，板野，旧土成，神山，山川などと上郡のほとんどでHLLになっていて，上郡の池田型が広がる傾向を見せているのだが，今回は下郡のアクセントが確認された。

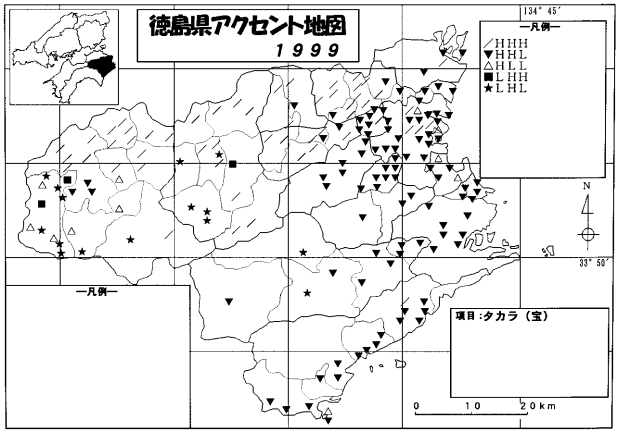

図1　「宝」のアクセント

【注】上の図で，／がHHH，▼がHHLである。

表5　3拍名詞のアクセント

第1類	形，着物	HHH／HHH－H
第2類	ふたり，二つ	LHL／LHL－L
第3類	小麦，二十歳	HLL／HLL－L
第4類	頭，鏡 女，男 刀，サザエ	HHH／HHH－H HHL／HHL－L HLL／HLL－L
第5類	油，朝日，心 簾（すだれ）	HLL／HLL－L HHH／HHH－H
第6類	兎，蛙	LLH／LLL－H
第7類	鯨，便り	LHL／LHL－L

4）動詞のアクセント

2拍動詞は，第1類（似る，煮る，買う，寝る）がHH，第2類（来る，得る，読む）がLHであった。第1類と第2類の対立があり，これは伝統的な京阪式アクセントと同様である。高起と低起の対立があった。

3拍動詞は，「歌う，囲む，並ぶ，使う」（第1類五段活用），「植える，着せる，負ける，燃える，割れる」（第1類一段活用），「余る，思う，泳ぐ，困る」（第2類五段活用），「降りる，起きる，建てる」（第2類一段活用）を調べた。「歩く」などの第3類は調査語彙に含めていない。その結果は，**表6**に示すとおりである。

表6　3拍動詞のアクセント

第1類五段活用	歌う，囲む	HHH
第1類一段活用	植える，着せる	HHH
第2類五段活用	余る，思う	HHH
第2類一段活用	降りる，起きる	LLH

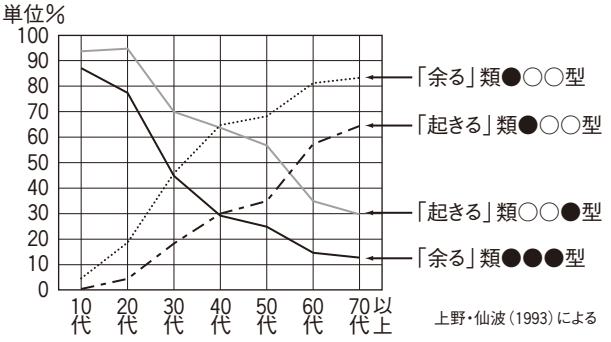

図2　3拍動詞「余る」類と「起きる」類とに聞かれる終止連体形アクセントの変化の実態（徳島市）

3拍動詞の第1類は五段活用・一段活用ともにHHHであり，安定した伝統的京阪式アクセントである。一方，第2類の五段活用動詞アクセントは，室町時代以降の伝統的京阪式アクセントではHLLになるところであるが，HHHが安定して聞かれた。これは京阪式アクセント（徳島型）で起こりつつある変化の一つであるが，今回高年層（78歳以上）で安定してHHHが聞かれたということは注目に値する。山川町ではかなり早い時期に第2類（五段動詞）の音調の変化HHL→HHHが完了していたと見られることになる。また，一段活用動詞は，伝統的京阪式アクセントであれば，これもHLLなのだが，LLHへの変化が進んでいる。1992年の段階で，徳島市の場合は，当時70歳代がLLHで発音していたのは，五段活用で10%余り，一段活用で30%強でしかなかった（**図2**：上野・仙波1993）。

4拍動詞は高起と低起の二種類があり，高起語の「固まる，教える，別れる」の類はすべてHHHH，低起語の「破れる，抱える，支える」の類はすべてLLLHであった。それぞれの語について，ユレることなく，全員同じ音調で一致していた。

5）形容詞のアクセント

2拍形容詞は，第1類の「酸い」がHL，第2類の「良い，無い，ええ」がLHであり，両者の対立があった。

3拍形容詞は，第1類（赤い，浅い，厚い，甘い，

薄い，重い，暗い），第２類（青い，熱い，痛い，白い，広い，安い，細い，長い，古い，強い）ともにHLLであって，類の別がなく，徳島県北部の他の地域と変わりはない。県内において，第１類がHHLとなって，古風なアクセントを示すのは，県南部，特に阿南市である。

６）アクセントに関するまとめ

まとめとして，以下の諸点を指摘しておく。

・徳島市中心部の京阪式アクセント（徳島型）アクセントでは，２拍名詞第４類が第５類と合流しつつあり，音調がLL－HからLH－Lに変化しつつあるが，山川町の高年層にはその傾向は見られなかった。全ての話者からLL－H（後続語が高起ならLL－L）が聞かれた。

・単語を個別に見ると，京阪式アクセント（徳島型）の伝統的なアクセントと異なる音調として，３拍名詞第４類「頭」「袋」「鏡」「宝」から高平調（HHH）が聞かれた。

・３拍動詞第２類（五段活用）「余る」「思う」「泳ぐ」「困る」など，伝統的な京阪式アクセント（徳島型）のアクセントではHLLとなる語については，全ての話者からHHHが聞かれた。これは変化後のアクセントが優勢であるということになり，山川町ではアクセント変化の速度が速い部分があると言える。山川町より西部では讃岐式アクセント（池田型）が分布しており，そこでは第２類（五段活用）は全世代でHHHと発音されるが，その影響を受けた変化かも知れない。

４．その他の音声的特色

１）ガ行鼻濁音

ガ行鼻濁音は衰退する傾向を見せながら，一方で「正しい日本語」の発音として保存の努力が払われもしている。ところで徳島県内でのガ行鼻濁音の分布は，森（1982）では，うわて・海部に多く，上郡では少ない。山分と下郡には「ある」とだけ記されている。今回の教示者の発音に就いてみると，つねに明確な鼻濁音で発音されていることはないようであった。たとえば，「小麦が」のギやガが鼻濁音で発音されるかと思えば「トカゲが」では鼻濁音が現れないといった具合である。

２）セ・ゼの口蓋化，合拗音

サ行のセ・ザ行のゼがそれぞれ口蓋化したシェ［ʃe］・ジェ［ʒe］になる現象は残っている。しかし，合拗音のクヮ［kwa］・グヮ［gwa］や，ダ行音の前に鼻音が現れるといった現象は確認できなかった。

『改訂山川町史』の「方言」の章「３，山川町の方言」には，「古態とみられる特色音節」として次のような例を挙げている（一部省略した）。

（イ）〔kwa〕　例　クヮイゴー（会合）
（ロ）〔gwa〕　例　グヮイカン（外観）
（ハ）〔se〕（ママ）　例　シェンニン（専任）
　　シェーカツ（生活）
（ニ）〔je〕（ママ）　例　ジェンジェン（全然）

このうち，／セ／の発音には［シェ］［ジェ］，つまり口蓋化した［ʃe］［ʒe］がまだ残っていた。［ヤマシェ］（山瀬），［シェズメ］（瀬詰），［アジェ］（畔）などである。また，［センキョー］［seŋkjoo］（先頃），［ゼンジェン］［zeŋʒeN］のように口蓋化しない場合，また［セイジツナ］（誠実な）の「セ」がごく軽くしか口蓋化しない，［セ］と［シェ］の中間の発音も現れた。

「オドロク」の「ド」の前に「ン」の響きが聞かれる発音が観察されたが，たまたまそのように発音されただけで，ダ行子音の前に多く鼻音が現れるという現象は認められなかった。

合拗音（kwa，gwa）は，確認できなかった。合拗音を含んでいた「往還（オークヮン）」は「オーカン」，「喧嘩（ケンクヮ）」も「ケンカ」，「学会（ガックヮイ）」，「図書館（トショクヮン）」もそれぞれ「ガッカイ」「トショカン」と直音で発音されている。山川町の方言から，合拗音はもう完全に消えてしまったと思われる。

２）音韻顛倒など

「湯殿」を「ユンド」と言う。これは，ダ行音の前の鼻音（入り渡り鼻音）が，独立した「ん」になり，その代わりに語尾の「の」が脱落したものであろう。

５．文法

１）音便形の使用

（１）形容詞の場合

シク活用形容詞の連用形がウ音便形の「～シュー」

をとることもあるが，「～シー」になることもある。ウ音便は１例だけ現れている。

①ナツカシュー　オモエテ（懐かしう思えて）

「～シー」の形は連用形と連体形に見られるが，それぞれアクセントが異なっている。

②オンナノヒトガ　ツコタラ　ヤサシー（LLHL）カンジルナ（女の人が使ったら優しく感じるな）。

③ヤサシー（HHLL）ヨーニ　キキトレル（優しいように聞き取れる）

なお，この「優しく」が「ヤサシー」になる現象は，県下全域に広く分布すると見られ（森1982，仙波他2002），これまでの阿波学会の調査（「うれしくて」で調査）においても，ウレシューテよりウレシーテの方が多いという結果が得られている（美郷，一宇他）。

（２）動詞の場合

ア．音便

ワ行五段活用（古語ではハ行四段活用）の連用形がウ音便ではなく促音便になる例が見られた。

①ヨソノコトバ　ツカッタラ　ユーエツカン　カンジル（よその言葉使ったら優越感感じる）…。

これは，方言形式としてはウ音便（ツコータラ）かまたは短縮形（ツコタラ）が使われるのが普通であろう。

②オンナノヒトガ　ツコタラ(女の人が使ったら)

③オララワ，ヨーツコータナ（オララ〔自称詞〕はよく使ったな）。

「思う」の場合も同様である（なお，促音便形は確認していない）。

④カオーカカオーマイカオモテ（買おうか買おうおまいか思って）

⑤ヨソデワ　アイタット　イワンノヤナト　オモーテ（よそでは〔熱いときに〕アイタっと言わんのやなと思って）

イ．アスペクト

森（1982）によると，アスペクト形式の内「テアル」が「チャール」になるのが下郡の特徴とされている。今回の談話を通しても，それが確認できた。

①ソコニ　オイチャールッテ　イーヨッタナ（そこに置いてあるって……）。

②オイチャールトコロ（置いてあるところ）。

③カイテクレチャーッテモ（書いてくれてあっても）。

継続を表すアスペクト形式のヨルが続く場合，「降る」では「フンリョル」だけが確認されたが，「ブル（漏る）」の場合は，「ブンリョル」と「ブッリョル」が回答された。

ウ．打消の表現

「無くなる」は「ノーナル」と言う。

①ノコシテオイテクレント　ノーナッテシマウモンナー（残しておいてくれんと，無うなってしまうもんなあ）。

②ダイガ　カワッタラ　ノーナンリョルナー（代が代わったら無うなんりょるなあ）。

（３）助動詞

ア．断定の助動詞「ダ・ジャ・ヤ」

森（1982）は，京阪方面の影響がさまざまに見られる灘（海部郡）において「～ヤロー・ホヤケン・ホヤサカイ」のように「ヤ」が使われ，下郡・うわて（勝浦・小松島・那賀・阿南）においては，都市部青年層で「～ヤロー・ホヤケン」などを使うことがあると指摘している。また，仙波は上勝町で，男性が「ジャ」を使うのに対して女性が「ヤ」を使う傾向があることを耳にした。そして，仙波（2006）は，藍住町において高齢者の談話の中に，ひんぱんに「ヤ」が現れることを報告している。『徳島県言語地図』（**図３**）を見ると，「ヤ」はうわてで優勢である他は，鴨島・美郷・神山町北部・徳島市・阿南市，そして東祖谷で回答されている。これらの報告は，調査時期，調査対象，調査密度に相違があるため，うわて地区で「ヤ」の使用が多いことと，全県的には「ジャ」の使用が多いことだけが確かな事実として認められるように思う。

今回の談話資料からは，「ジャ・ヤ」の例を多く確認できたが，その使用には個人差があるようにも見える。特に吉田氏には「ヤ」の使用が多く，これは県外での生活歴が影響しているのであろう。全体としては「ジャ」が多かった。発話量の関係で，全員についての分析をここに報告することはできないが，吉田氏の場合，

①（運動会を）ゴードーデ　ヤルモンジャケンネ。

②（岡本韋庵は）スバラシーヒトヤケン。

のように，「ジャ・ヤ」の両方を使っていて，両者を使い分けているようでもなかった。

また，阿部氏の発話からも，多くは拾い出せなかったが，次の例がある。

③（古地図を）タマタマ　モットンジャケンド

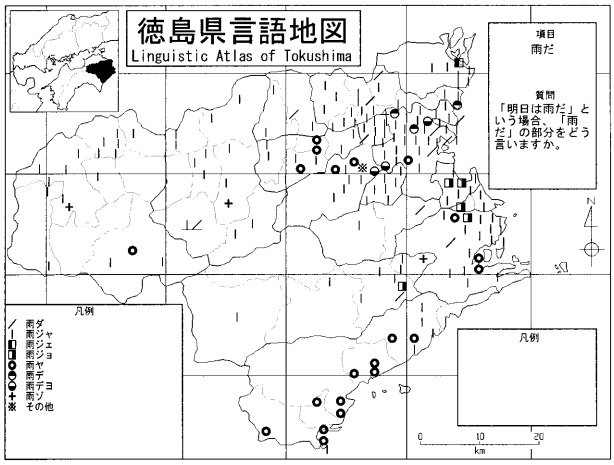

図３　雨だ

イ．推量の助動詞「ダロー」

なお，徳島方言では，推量の助動詞「ダロウ」を「ジャロー」と言う地域が山分の他にも広がっているのだが，吉野川流域の平野部（里分）を中心に「ダロ（ー）」が使われることが多い。

今回の談話の中には，次の例がある。

④アセーカイタラ　アマイモン　ホシーンナルダロー？（汗かいたら，甘いもん欲しーんなるだろう？）

⑤コレ　イチブカ（一部しか）ナカッタンヤロナ。

のように，「ダロウ」にあたるところで，「ヤロ」が現れることもある。

（４）助詞

ア．原因・理由を表す助詞ケン・ケニ，キン・キニ（付：ケレドの意のキンド）

森（1982）が示すところによれば，原因・理由を表す接続助詞にキン・キニヲ使う地域は，美馬郡・三好郡，すなわち上郡地域であり，仙波他（2002）においても，大きく見れば同様の結果が得られている。

これに対して，『山川町史』（1987）には，「原因・理由を表わす接続助詞「から」は，「ケン」を多用し，ときに，「キン」「キニ」が出現する」と書かれている。

今回の調査では，接続助詞の「キン」「キニ」は確認されなかったが，語形の類似する「ケンド」にあたる「キンド」が聞かれた。

①コーケイシャオ　ソダテルッチューキンド（後継者を育てると言うけれど）。

また，「カラ」が現れることもあった。

②アメヒトツデモ　エーカラナ，チョット　クチイ　イレタラ

（飴一つでもええからな，ちょっと口へ入れたら）

③セッカクノ　ホーユー　ガクジュツチョーサヤカラ。

（せっかくのそういう学術調査やから）

６．語彙

１）失われた語

各地の方言集に記録されている語の中には，もうすでに使われなくなっている語が少なくないような印象を受けるが，はじめにそのような語を挙げる。

「ギョシナル（御寝なる＝お休みになる）」や「ハイリョ（下さい＝動詞または補助動詞として）」はもう使わないという。「ハイリョ」については，森（1982）に「下郡里分老年層」の用語という指摘がされている。

「オヒナリナシテ（お目覚め下さい）」については，「年寄りを起こすときにお母さんが言いよった」という。もう過去の言葉になってしまっている。

「センキョー（先頃＝先だって）」も古い言葉であるらしい。

２）『山川町史』に収録された語彙から

（１）性格を表す言葉（その１　あほバカ表現）

今回の調査の目的の１つは，性向語彙をできるだけ拾い上げることであった。性向語彙とは，社会的規範に照らして，人の行動パターンを評価する語であるが，これらのうち，いわゆる「あほバカ表現」は，方言の分布（周圏分布）を説明するために，もっとも有効な材料を提供してくれたものである（松本1993）。なお，これを詳細に点検して行くことで比喩による造語の発想法を見ることができる。

町史の中のあほバカ表現

まず，『山川町史』の中のあほバカ表現を見てみ

よう。この項では，『山川町史』（1959）をA，『改訂山川町史』（1987）をBで示す。また，書名をいちいち『』で示すことはしない。

アホーダマ　A

アンガー　A　鮟鱇（サンショウウオの類）の動きが鈍いことから転じて言う。中世末期には京都で使われていた。県内では，板野郡を中心に下郡に分布する（仙波他2002）。なお，神領村誌・羽ノ浦町誌・脇町の方言と語詞などにも出ており，阿波言葉の語法（金沢治1961）には「東西祖谷」とある。

トボケサク　AB　他の資料には見られない。

トンマ　A　小型国語辞典にも載る，全国表通語。

トロコイ　B　とろこい　どんくさい・にぶい。四国各県および大阪市で使用。

ハチフン　A：うす馬鹿　B：少々足りない人

他の資料に見られない。十分でない，の意による。

ビンヅメ（瓶詰め）B　高田（1985）にのみ。瓶詰めは上部に必ず満たされていない部分があることから言う。

今回，談話で話題になったあほバカ表現

【あんがー系】　アンゴタレ，ドアンゴ，ドアンゴサレ，ダンゴサレ

【ほっこ系】　ホッコー

この語は，香川県に特徴的（松本1993）とされ，県内では上板，阿波市阿波の香川県境付近に確認されている（仙波他2002）

【ほれ系】　ホレ，ドボレ

上郡特有の語であると見られてきた。

【ほうけ系】　ホーケンド，ホケットー

「惚け人」であろう。「ホーケント（ー）」が兵庫県の方言資料にあるようだが（日本方言大辞典），ホーケンド，ホケットーは方言資料に見当たらない。

ウトイ（HLL）　トロコイ。下田氏のメモに記されていた。県内の方言資料で見出しに立てているのは，阿波言葉の辞典だけだが，全国各地で通用する語である。

シミッタレ　しみったれ　けちんぼう　A

（2）山川町誌の中の性向語彙

この項で，示したアクセントは，下田氏に発音して貰ったものである。

アズナイ　幼稚な　B

県下広くに分布する。この語形で使われるのは徳島だけかもしれない。古語の「あどなし」にさかのぼる語。

イキスギモノ　いきすぎ者　生意気者　A

イキスギモン　いきすぎもん　生意気な人　B

江原町郷土史に「いきすぎもの」，藍住町誌に「いきすぎもん」，改訂阿波言葉の辞典やたのしい阿波の方言に見られるが，今回の調査では，分からない言葉のようであった。もう使われていないようである。

オゲッター　おげったあ　うそつき　A

オゲット　嘘ツキ　下田さんのメモ

オゲッタは，下に示すように県内の多くの方言資料に掲載されている。全国的に見ると，四国および九州北部に多い。まだ生きて使われているようだ。

改訂阿波言葉の辞典（改訂三版）：オゲッタ　嘘つき者（卑）阿波の特徴ある方言で政治的手腕があって，清濁両方の度量ある人物をいう。従って政治家や実業家の性格をあらわすには一番適当な方言である。オゲスッタ

阿波半田の方言：オゲッタ　オゲッタクロウ

脇町の方言と語詞：オゲッタ：オゲッタクソ

神山の方言（上分，神領）：オゲッタ：オゲッタア

うそ・にせ

小松島市史：羽ノ浦町誌：オゲスッタ・オゲッタ

大ぶろしきを広げて言行の一致せぬ人。相生町誌，阿南・西方村誌，牟岐の方言（役場版）

なお，オゲットは『たのしい阿波の方言』『脇町の方言と語詞』にゲットウの形で示されているほか，木屋平の新居氏のメモ（仙波2008）に見られる。

イケイケ　いけいけ　行きあたりばったり　B

この意味では，県下各地で使われているようだが，全国的には徳島特有のようである。

ガイナ（HLL）　気強い　A　強気，気性荒イ（下田氏のメモ）

コスイ　ずるい　B

ジョーバレ　強情な　AB　ジョーバリとも。ジョーバリの形は香川と山梨に分布。ジョッパリが東北各地に分布する。

ドグタロー　おしゃべり　A

神山の神領村誌に記録がある。他に記録なし。

ナキミソ　泣き虫　A

小型国語辞典にも見出しがある語。

ヘラコイ（HHLL）　ずるい・悪がしこい　B

ワルガネ　いたずら者　AB

神領村誌，藍住町誌，鴨島読本，江原町郷土史，脇町の方言と語詞に見られる。吉野川流域，神山地区の方言か。阿波言葉の辞典には「自分の家の童を卑下していう語」とある。県外では高知・愛媛・大分の資料に見られる。

ワルンゾ　いたずらもの　B

他の資料に見当たらない語である。

その他の語彙で注目される言葉

方言語彙を網羅的に列挙することは，町史に譲って，以下には，今回の談話で使われた語を挙げることとする。

エレキ　①電気　エレキガツイタ（電灯がついた）②磁石　ジシャクノヨーナ　ナニオ　エレキトツカイヨッタ。

オチャンポ（LHLL）　女陰。

この語は，阿波の国言葉だけに見られる。

オドロク　目を覚ます　→　ネオドロク

コケデル（HLLL）　飛び出す。ホーゲンガ　コケデル（方言が飛び出す）。

ゴヘーダ（LLLH）　石炭。ゴヘーダオタク（五平太を焚く＝石炭を焚く）。西日本で広く使われていた。北九州で，五平太という者が初めて掘り出したことによるという（日本国語大辞典）。

ネオドロク（寝おどろく）

ハッシャグ　桶などが乾燥してたがなどがゆるむこと。オケガ　ハッシャイデ　ブルンジャ（桶が渇きすぎて〔水が〕漏るんだ）。

7．談話例（抜粋）

ここには，分析の素材とした談話の一部を紹介する。なお，仙波以外の発話者は匿名にした。また，一部の語にはアクセントを付してある。聞き取りが困難だった部分は「・・・」で示した。なお，括弧内の漢字交じり文は，ある程度共通語風の言い方に直した。

談話1

P：（ホレト）ヒワイナ（LLHL）　ハナシデ（HLLL），コンナトコデ，オンナノ（HHLL）ヒトオル（HL）ケンドモ，イカンケド，マ，コンナンモ　アノ　センセーニワ　シットッテモロタラ　エーケド

（それと卑猥な話で，こんな所で，女の人おるけんども，いかんけど，ま，こんなんも，あの，先生には知っとって貰うたらええけど）

P：アノー，オチャンポ（LHLL）ッテ

（あのー，おちゃんぽって。）

仙波：ハイハイ。

P：ホイテ　コレワ　アノー　ヨソデ（HLL）ツージン（LLLL）ネー　コノコト

（そして，これはあのー。余所で通じんねえ，このこと）。

仙波：通じませんね，ええ。

P：アノ，アワジシマ（HHHHH）ノ　ヒトニワツージル，ワタシワ　アチコチ　ユーテミテネー

（あのー淡路島の人には通じる。私は，あちこち言ってみてねえ）。

P：（コレ）ナンデーッテ　イーヨンデ。ホタトコロ，ホカノホーホーデナイトネ，ソ，ヨーキカン。ホタラ　ダンシェイノデモ　マ，インケイ（LLLH）トカ，ソンナコトバ　ツカワンケド，コドモントキヤネ，ズバリ　バーッテ　イッキョル。

（「これなんで（何故）？」って言っているんで。そしたところ，他の方法でないとね，聞けない。そしたら男性のでも，「陰茎」とかそんな言葉使わないけど，子供のときはね，ずばり，ばーっと行ってる〔言っている〕。）

P：ヤハリ，コノヘン，マ，アワ，アワハンデスカ，ドクトクノ　コトバ　キータ・・・（あと聞き取れず）

（やはり，このへん，ま，阿波藩ですか。独特の言葉聞いた・・・）。

Q：ホター，オーサカデナー，アノー，ナンチューカ　コー　ナカイサン（HHHHH）ノコトオ　オチ

ャコハン（LHLLL）テ　イヨッタナア。
（大阪でなー。あのー仲居さんのことをおちゃこはんと言うたな。）
R：ホリャマー　イマデモ　アルナ。
（それはまあ，今でもあるなあ。）
S：エイガ（HHH）ノ　ウリコ（HHH），オナゴ（HLL）ノ　ウリコナ，エイガカン（HHHLL）ノ
（映画の売り子，女子の売り子なあ，映画館のをおちゃこ，おちゃこ。）
D：ホージャ，ホレワアルナー。
（そうじゃ。それはあるなあ。）
S：アレワ　オチャコオチャコ　ユーンジャ。
（あれは，オチャコオチャコ言うんじゃ。）

談話 2

A：モー　ジンジャヤネー，ジンジャノ　マイネンホノー　オシメ　ツクッタリネー,オソージシタリ，コノアタリノ　ジンジャ　ミナ　マモッテイッキョンデス。
（もう，神社やねえ，神社の毎年，ほのお締め作ったりねえ，お掃除したり，このあたりの神社みな守っていってるんです。）
ホタラ　コーケイシャオ　ソダテルッチューキンドホリャ　メンドイシネー。
（そしたら，後継者を育てるっていうけれど，それは難しいしねえ。）
B：マー　ワタシヤノ　グループデモ　マー　アノナントカ　アトツイデ　ヤッテクレルヒトガ　オリマスンデネ，ワタシモ　モー　トシヨッタケン　ヤメヨーカナト　オモータラ　イエンノデスヨ，トシヨッタヤユーテ。
（まあ，私などのグループでも，まあ，あのなんとか後を継いでやってくれる人が居りますんでね，私ももう年寄ったから止めようかなと思ったら，言えないんですよ。年寄ったなどと言って。）
（笑）
C：モクヒョーニナー。モクヒョーニ　イカナ。
（目標になあ，目標に行かなければ。）
D：ソレワ　マダ　ヤッテモラワナンダラナー。
（それはまだやって貰わなければねえ。）
A：ホテ　ヤメサシテクレンノデスワ。
（それで，止めさせてくれないんですよ。）
ホナケンネー，ワタシヤモ　ニョーボーニ　オコラレナガラネー　ヤッパリ，（ヤヤ間（ま）アリ）ホンマスバラシー　ナカマトネー，・・・デキル（ン）ガトッテモ　ウレシーン
（だからねえ，私なども女房にしかられながらねえ，やっぱり，（ヤヤ間アリ）本当にすばらしい仲間とねえ・・・～できるのがとっても嬉しいの…。）
D：シェンシェヤ　ヤメテ　イエデ　オッタラ　イカンデ。
（先生は，止めて家でいたらダメですよ。）
ヤッパリ　ムリシテ　デテイクトコエ　デテイテ，ホレワ　モー　イチバン　ダイジナモン。
（やっぱり無理して出て行くところへ出ていって，それはもう，一番大事なもの…。）
（中略）
D：シェンセー　ヨーケ　ヤク　モットルケンネー。
（先生，たくさん役を持っているからねえ。）
A：ホノ　タイヤク（LLLL）ガ　ニジュークンチノ　アワガッカイデ，コレデショー。
（その大役が二十九日の阿波学会で，これでしょう。）
アワガッカイデー，アノ　コーエン（LLLH）シテクレデショー。ホンデネー，モー　マイッタデスヨ。
（阿波学会で，あの，講演してくれでしょう。それでねえ，もう参りましたよ。）

8．おわりに

今回の調査では，以下の方々にお教えをいただいた。記して感謝する（五十音順・敬称略　括弧内は生年）。

阿部保夫　大正15（1926）年
井上　和　昭和７（1932）年
加藤　明　大正14（1925）年
川村円司　大正14（1925）年
下田幸一　大正10（1921）年
吉田幸治　大正14（1925）年

なお，執筆の分担を記しておく。アクセントに関しては村田が，また断定の助動詞については峪口が

行い，その他の事項と全体の整理は仙波が行った。

文献（１）

秋永一枝，上野和昭，坂本清恵，佐藤栄作，鈴木豊編（1998）：『日本語アクセント史総合資料研究篇』東京堂出版。

石田祐子・岸江信介（2001）：「徳島県諸方言アクセントについて」『言語文化研究　徳島大学総合科学部　第８巻』。

上野和昭・仙波光明（1993）「徳島市における３拍動詞アクセントの変化の実態」『徳島大学国語国文学　第６号』徳島大学国語国文学会。

上野和昭編（1997）：『日本のことばシリーズ36　徳島県のことば』明治書院。

加藤信昭（1968）：「境界地帯におけるアクセントの問題―吉野川流域を中心として―」日本方言研究会第６回発表原稿集。

岸江信介・仙波光明・岡田祐子・村田真実（2010）：「徳島県吉野川流域アクセントの動態―吉野川流域南岸グロットグラム調査報告（2）―」徳島大学大学院国語学研究室。

坂本清恵・秋永一枝・上野和昭・佐藤栄作・鈴木豊編（1998）：『「早稲田語類」「金田一語類」対照資料』アクセント史資料研究会。

仙波光明・岸江信介・石田祐子編（2002）：『徳島県言語地図』徳島大学国語学研究室。

仙波光明（2006）：「藍住町の方言」『阿波学会紀要　第52号　藍住町総合学術調査報告』阿波学会・徳島県立図書館。

仙波光明（2008）：「美馬市木屋平の方言」『阿波学会紀要　第54号　美馬市木屋平　総合学術調査報告』阿波学会・徳島県立図書館。

松本修（1993）：『全国アホ・バカ分布考―はるかなる言葉の旅路』太田出版（1996年，新潮文庫）。

村田真実（2010）：「吉野川流域のアクセント―京阪式アクセントと讃岐式アクセントの境界―」徳島大学大学院平成21年度修士論文。

森重幸（1982）：「徳島県の方言」『講座方言学11　中国四国地方の方言』国書刊行会。

山川町史刊行会（1959）：『山川町史』山川町史刊行会。

山川町史編集委員会（1987）：『改訂山川町史』改訂山川町史刊行会。

文献（２）

徳島県下の方言の所在は，以下の資料を検索の対象とした。

相生町誌編纂委員会編（1973）：『相生町誌』相生町。

藍住町史編集委員会編（1965）：『藍住町史』藍住町。

井筒茂編（1931）：『稿本　宝田村誌略 巻九』井筒茂。

井上一男（1937）：「木頭地方々言語集」『郷土阿波　14号　通巻14』阿波郷土会。

鬼篭野村誌編集委員会編（1995）：『鬼篭野村誌』鬼篭野村誌編集委員会。

金沢治（1961）：『阿波言葉の語法』徳島市中央公民館付属図書館。

金沢治（1976）：『阿波言葉の辞典』小山助学館。

金沢浩生・仙波光明・岩佐美紀・石田祐子（2001）：「相生町の方言」『総合学術調査報告　相生町　阿波学会紀要　第47号』阿波学会・徳島県立図書館。

上那賀町誌編纂委員会編（1982）：『上那賀町誌』上那賀町。

上分上山村誌編集委員会編（1978）：『上分上山村誌』上分上山村誌編集委員会。

神山町成人大学編集部編（1990）：『神山の方言と言い伝え』神山町教育委員会。

鴨島町（1940頃か）：『鴨島読本』鴨島町。

川島信夫・森重幸（1992）：「半田町の方言」『総合学術調査報告　半田町　阿波学会紀要　第38号』阿波学会・徳島県立図書館。

木沢村誌編纂委員会編（1976）：『木沢村誌』木沢村誌編纂委員会。

國見慶英（1999）：『脇町の方言と語詞』國見慶英。

小松島市史編纂委員会（1977）：『小松島市史風土記』小松島市。

木屋平村史編集委員会編（1996）：『木屋平村史』木屋平村。

島田泉山（1901頃）：『阿波希ん奴』（稿本）。（仙波光明（1995）「徳島大学方言研究会報告４　資料紹介『阿波希ん奴』」『徳島大学国語国文学　第８号』徳島大学国語国文学会。）

尚学図書編（1989）：『日本方言大辞典』小学館。

神領村誌編集委員会編（1960）：『神領村誌』神領村誌編集委員会。

高田豊輝（1985）：『徳島の方言』高田豊輝。

田村正編（1968）：『三名村誌』山城町。

俵裕（1990）：「祖谷の方言」『ひがしいやの民俗』東祖谷山村教育委員会。

土壁重信（1976）：『消え去りゆく大里言葉』土壁重信。

西方村誌編集委員会（1983）：『西方村誌』西方村誌編集委員会。

日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館辞典編集部（2001）：『日本国語大辞典　第二版』小学館。

橋本亀一（1939）：『阿波の國言葉』国書刊行会。

羽ノ浦町誌編纂委員会編（1995）：『羽ノ浦町誌 民俗編』羽ノ浦町。

半田町方言保存会編著（2005）：『阿波半田の方言』半田町方言保存会。

ふるさと佐那河内編集委員会編（1992）：『ふるさと佐那河内』佐那河内村。

森本安市（1979）：『たのしい阿波の方言』（阿波文庫７）南海ブックス。

西内滝三郎（1920）：『一宇村誌』一宇村。

三木近太郎（1954）：『古宮村誌』（稿本）古宮村郷土研究会。

『美馬郡木屋平村の方言』
http://www.tcn.ne.jp/~nankai/hougenn.htm

『牟岐町の方言』
http://www.mugitown.jp/bunkzai/hogen/hogenfr.html

鷲敷町史編纂委員会編（1981）：『鷲敷町史』鷲敷町。

Dialect of Yamakawa Cho in Yoshinogawa City, Tokushima, Japan.

SENBA Mitsuaki, MURATA Mami, SAKOGUCHI Yukako,

Proceedings of Awagakkai, No. 58（2012）, pp.167－176.